



日本の子どもは、世界一幸せ？！

ネットニュースの、上記のような表題を見て、記事を読みました。しかし、本当は「100年前の・・・」が冒頭につき、「と言われていた」と続くのです。この記事は、東京大学名誉教授の養老孟司さんと思想家の内田樹さんの対談の内容でした。書籍「日本人が立ち返る場所」からの抜粋のようです。

世界一幸せとの記述をしたのは、1880年に『日本奥地紀行』という本を出版したイギリス女性、世界的な旅行作家「イザベラ・バード」さんです。そこには、「私は、これほど自分の子どもをかわいがる人々を見たことがない。子どもを抱いたり、背負ったり、歩くときには手をとり、子どもの遊戯をじっと見ていたり、参加したり、いつも新しい玩具をくれてやり、遠足や祭りに連れて行き、子どもがいなくていつもつまらなそうである」(高梨健吉訳、平凡社東洋文庫、1973年)というような記述があるそうです。子どもが労働力として使われたり、貧困に苦しんでいたりしたこともあったのではないかと考えると日本の全てがそうだったと言い切れるわけではないと思います。しかし、イギリスから渡航して日本を旅した女性が、そう感じたということは、「そこには、そういった姿が確実にあった。」ということなのでしょう。

その対比として取り上げられていた内容は、日本は先進7カ国で唯一、10代における死因の1位が「自殺」の国だ、という事実でした。そしてこの記事は、世界一幸せだった国を、そうしてしまった「犯人」は誰か(何か)ということについて対談していきます。

その中で、養老さんはこう言います。

“不愉快なことをずっと続けて、このままいくのかと思うと気が滅入るんでしょね。子どもの時間も大人の時間と同じ人生の一部ですから。子どもの時間は「将来のため」と言って、塾にやったり勉強させたりしているのも、完全に**子どもの時間を軽く見てる**わけでしょう。実は人生全体で見れば**同じ重さ**なんです。”(出典 プレジデントオンライン)

それを受けて、内田さんは、“**「子どもは人間でない聖なるもの**」という考えが日本にあったこと、ヨーロッパでは「子どもは小さな大人」として扱われていて、「小さくて、弱くて、能力の低い労働者」に過ぎなかったのだ”と話します。養老さんは、“**今の社会の大人たちは、そういう(聖なるもの)捉え方を全部忘れちゃったから、子どもが不**

幸になるんでしょね。”と継いでいらっしまいました。(出典 プレジデントオンライン 筆者要約加筆あり)

僕は、養老さんが言う、子どもの時間も大人の時間も同じ人生の一部、「**人生の中で価値は同じ**」という考え方に共感しました。そして、1989年に国連採択された「子どもの権利条約」の事を思いました。これは、子どもは「弱くておとなから守られる存在」という考えばかりではなく、**子どもも「ひとりの人間として人権(権利)をもっている」、つまり、「権利の主体」だ**という考え方に大きく転換したものです。

僕ら大人は、ここを踏まえて、子どもへの接し方を改めて考える必要があるのかもしれない。未熟で出来ないこともいっぱいある存在だけれど、必ずしも教え導かねばならないわけではなく、主体的によりよく育てようとしている存在だと、子どもを子どもそのものとして認めていくことが大切です。そうして、目の前の子どもを丸ごと愛し、リスペクトしなければいけないと思うのです。

ではかつて、子どもが世界一幸せと言われた国の10代が、何故「自殺」を選んでしまうのでしょうか。1つは、養老さんらが話していたとおり、大人が「子どもを聖なるものとし、まるごと認めること」ができなくなったからなのでしょう。

もうひとつは、子ども自ら「考え、判断して行動する」機会が極端に少なくなったからではないでしょうか。昔の子どもは、それを「遊び」を通して毎日、毎日していたのです。物づくりも日常でした。いつも「肥後守」というナイフを持ち歩いていて、切ったり削ったりしていました。何もなかったころから、自然の材料に働きかけて「遊び」のネタを創造したのです。様々な材料を集めて、秘密基地等を造ったり、今の感覚だと危ないと思われるような「遊び」も、自分たちで探りながら、試したりもしたものです。そうして、子どもだけの世界で、主体的に遊びこむことが、様々な子どもの力を育ててきたのです。「遊び=ゲーム」ではありません。残念ながら「遊び」の有り様が変わり、遊びが失われた結果、その中で育つだろう力が十分育っていないことが、その原因だと思います。では、これからどうするのか、大人すべてに問題が突きつけられています。みんな、知恵を絞らなければならないのです。あなたは、どうしますか。

イザベラ・バードさんが、今の日本を旅行して、旅行記を書いたとしたら、子どもについてどんな記述になるのでしょうか。「子どもが世界一幸せな国」と果たして、言ってもらえるのでしょうか。